

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称 : EBCP 志向の博士前期・後期課程のリンケージ
 機関名 : 大阪府立大学
 主たる研究科・専攻等 : 看護学研究科看護学専攻
 取組実施担当者名 : 町浦美智子
 キーワード : 臨床看護学・慢性看護学；その他 EBCP、患者教育、介入評価

1. 研究科・専攻の概要・目的

博士前期課程教育目標：人間の存在と生命の尊厳について深く理解し、広い視野に立って精深なる学識を修め、専門分野における教育研究能力、あるいは高度に専門的な実践能力を有する人材を育成する。

博士後期課程の教育目標：豊かな学識を有し、看護学分野において学術研究を推進し、その深奥を極め、自立して研究活動を行うことができる能力を有する人材を育成する。

本研究科は博士前期（修士）課程を平成10年に、後期（博士）課程を平成12年に開設し、これまでに専門看護師コース修了者44名、修士論文コース修了者62名、博士後期課程修了者13名を輩出している。平成18年5月1日現在、教員数75名、在籍学生数74名を擁する研究科であり、全国の大学院看護学研究科の中でも教員数に恵まれているといえる。恵まれた教員人材の成果は、わが国最多の10分野（がん看護、クティカルケア、慢性看護、感染看護、小児看護、老年看護、地域看護、在宅看護、精神看護、母性看護）の専門看護師コースを開設するにいたっている。

2. 教育プログラムの概要と特色

(1) 博士前期と後期課程の有機的連結をはかる、EBCP (Evidence-based Clinical Practice) 志向のリンケージ・プログラム

看護学分野では国公立を問わず博士課程は前期・後期に分割されている。前者は卓越した実践家、後者は研究者養成と重点が異なるためである。社会的ニーズはいまだ急増し続ける学部教育の担い手を準備することであり、それは博士課程修了者を多数輩出することにある。博士前期と後期のリンケージ・プログラムは、前期から後期課程へと連続した進学を容易にし、数年の間隔を置く断続的進学の場合にも一貫性をもった修得を可能にする。ひいては本学の前期課程修了生は本学の後期課程に進学することを動機付ける。

現在、前期課程修了者の多くは CNS (Certified Nurse Specialist) を目指して実践の場へ、または助教・講師として教育の場へ進む。リンケージ・プログラムは後期課程へ直接進学することを動機付けるとともに、大学院教育の実質化として、根拠に基づいた臨床実践 EBCP の知の探究者としての若手研究者養成を目的とした。現在、前期および後期課程のそれぞれで必修科目として提供されている看護学研究法および理論看護学関連科目をさらに充実させ、EBCP に焦点化したリンケージ・プログラムを創出した。内容は Cochrane Collaboration や Campbell Collaboration が集積するエビデンスの批判的吟味と介入計画作成（前期課程）、RCT 研究の方法論探究とメタアナリシスや介入評価研究（後期課程）からなる、前期と後期を連結する教育プログラムである。各専門分野の教員によるグループ・ティーチングにより専門分野の枠にとらわれず、学生間の協働を生かす独自の試みである（図1）。

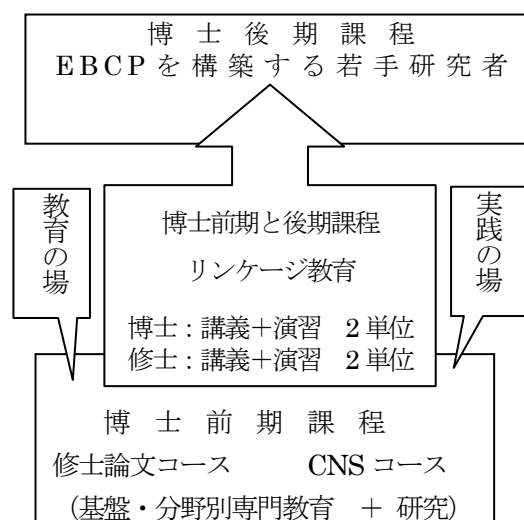


図1 履修プロセスの概念図

(2) Culturally sensitive な介入プログラム考案による創造性の発揮

欧米に軸足を置いた看護実践モデルは日本文化に導入

するには馴染まないことが多々ある。そこでアジア文化圏にわたる看護実践知の開発と構築が必要になってきた。アジア文化圏には日本、中国、韓国、タイなど、文化を共有した看護の考え方があり、共通した文化に根ざした本教育プログラムの開発は既存の看護モデルにアジア文化圏での特性を追加することになり、アジア文化圏での国際的通用性を有するものとなる可能性が大きい。中国ではこの10年間に日本と同様に看護系大学が10数校のレベルから一挙に100校を越す増設となり、教員不足が

深刻な問題となっている。本学には中国、韓国からの留学生が占める割合が多く、看護学部および看護学研究科にも毎年、数名程度の中国人留学生が在籍する。柔軟で創造性のある研究者は、文化的差異に鋭敏であり、看護援助の対象者の生活文化をよく理解するだけでなく、東アジア的な地理的文化特性にも敏感に配慮できることが求められている。

3. 教育プログラムの実施状況と成果

(1) 教育プログラムの実施状況と成果

① EBCP 志向の博士前期・後期課程のリンケージ

リンケージ・プログラムはリンケージIとIIの構成とし、それぞれ講義と演習からなる2単位の授業を創設した。リンケージIのカリキュラム内容と実施計画を表1に示した。

表1 リンケージI（講義・演習）のカリキュラムの内容と実施計画

	目標と内容	平成17年度 実施計画	平成18年度 実施計画
講義 15時間	<p><Part1>4コマ 目標：エビデンスを活用するために必要な基礎的知識を修得する。 内容：EBCPの必要性と考え方、EBCPの基本的なスキル(文献検索、文献の批判的吟味、エビデンスの適用性の判断)についての講義→外来講師に講義を依頼</p> <p><Part2>2コマ（平成17年度のみ実施） 目標：研究論文のクリティークの一方法に適用できるサブストラクションと概念分析の方法を理解する。 内容：サブストラクションと概念分析についての講義と研究論文を使用した演習</p> <p><Part3>2コマ（平成18年度は4コマ） 目標：臨床実践のエビデンスとなる研究論文を理論的な道筋を追って読み、エビデンスの質を評価し、臨床実践への応用方法を検討することができる。 内容：高質のエビデンスを提供する英語論文の批判的検討を行う。院生が文献を紹介・クリティークし、教員も補助的にクリティーク。steering committeeによるグループ・ティーチング。 ① 準実験研究 ② randomized control study</p>	<p><時期> 平成18年2月~3月</p> <p>(主な対象学生) 前期課程1,2年生 後期課程1,2,3年生</p>	<p><時期> 平成18年度8月</p> <p>(主な対象学生) 前期課程1年生</p>
演習 30時間	<p>目標：臨床実践プログラムの評価の一方法として、今後ますますニーズが高まる生体信号測定具体的な方法について、演習をとおして習得する。 内容：看護介入、運動負荷、リラクセーションにおける変化における生理学的指標の測定</p>	<p><時期> 平成18年前期</p> <p>(主な対象学生) 前期課程2年生</p>	<p><時期> 平成18年後期</p> <p>(主な対象学生) 前期課程1年生</p>

【リンケージ I 講義】

◆平成 17 年度実施（履修者 46 人）

履修者 46 人の内訳は、前期課程 1 年生 22 人、2 年生 12 人、後期課程 1 年生 4 人、2 年生 6 人、3 年生 2 人であった。全学生の 66.7% が履修し、本プログラムに対する期待感が感じられた。後期課程の学生は 14 条特例（社会人入学）対象の学生が多いため、履修者は少なかった。

Part 1 の学生の評価から、「研究論文の読み方が理解できた」との回答もあり、そのまま継続することが望ましいと考えられたが、担当者を次年度も外来講師に依頼するかは検討課題とした。Part 2 に関しては、学生の評価から「サブストラクションのグループワークは 1 時間では短い」との意見があり、各分野の特論、援助特論、そして演習科目において講義・演習していくことが望ましいと考え、次年度はプログラムから削除することとした。

Part 3 の内容は学生からの評価も高く、そのまま継続することとした。担当者を steering committee としたが、学生から教員の積極的参加に対して、「どちらでもない」との回答もあり、次年度はファシリテーターの研修を受けた教員が担当することにした。



写真1 17年度リンケージI講義；グループワーク

◆平成 18 年度前期実施（履修者 21 人）

Part 1 の講義部分だけを外来講師に依頼し、ワークショップ及び Part 2 のファシリテーターを本研究科の教員 3 名（町浦、松尾、中山）が担当した。担当した教員は McMaster 大学（カナダ）の EBCP ワークショップを受講し、本講義の準備及び具体的な内容を検討した。学生の本講義での学びは大きく、新しい手法を学ぶことができたことに満足していた。

【リンケージ I 演習】

◆平成 18 年度前期実施（履修者 20 人）

対象は前期課程 2 年生であり、履修者は 20 人であった。前期の 5 月は前期課程 2 年生の研究（課題研究、修

士論文特別研究）計画書の提出後という時期であったが、2 年生 26 人中 20 人の履修者がいたことは、学生には興味深いプログラムであったと考える。

＜学生の演習課題＞

- つまみと巻尺位からの筋力の推定
- 運動強度の違いが身体に与える影響—適切なウォーミングアップに向けて—
- 心拍 R-R 間隔変動スペクトル解析、抹消血流変化および生体インピーダンスによるタッチングと精油吸入がもたらす生体への変化



写真2 18年度前期リンケージI演習

平成 18 年度前期は、運動負荷やリラクゼーションによる生体的な変化から、看護への応用について検討することを課題としたが、運動負荷グループは学生自身の臨床での疑問が研究デザインを産み、演習へと発展したことは意義が大きい。演習は療養学習支援センターや人工気候室で行なった。今後、演習で学習した機器類を活用した看護評価に発展することが予測できる。リラクゼーショングループの発表からは、測定値の信頼性や妥当性について吟味する重要性を考察できていた。後期の演習では実験手法などによるデータの信頼性などの吟味も学習課題に入れる必要性が示唆された。

◆平成 18 年度後期実施（履修者 12 人）

前期開講の演習内容を検討した結果、看護学の研究方法として生理学的指標の活用という方向にシフトしたリンケージ I 演習とした。本演習の目的を看護研究における身体・心理・社会的な指標を測定する方法について理解し、測定用具の信頼性・妥当性について演習を通して学び、看護研究における活用方法を探求することとした。

＜学生の演習課題＞

- 密封式湯浴における下腿の浸漬範囲の違いが下肢血液量の変動に及ぼす影響
- 湯浴とホットパックによる足部温罨法施行時のリラク

セッション効果の比較

○家庭用電気マッサージチェアによる生体上のリラクゼーション効果の検討

発表会では、演習内容の看護における意義をはじめ、方法、結果、考察に沿った発表が行われた。各グループとも測定上の交絡因子の影響、機器の出力するデータの読み方、データの信頼性、実験方法としての限界など、器機による測定について、敬遠感が払拭されたり、課題が明瞭となるといった拾得があった。



写真3 18年度後期リンケージⅠ演習の発表

【リンケージⅡ】

リンケージⅡではエビデンスレベルの高い RCT 研究の方法論的な探求とメタアナリシスや介入評価研究について、さらに理解を深めた教育内容を提供し、自己の研究テーマに関するエビデンスを知識体系に位置づけることができることを目的とした。

リンケージⅡは主に博士後期課程1年生7名を対象として、講義1単位、演習1単位で構成した。平成18年度は11月に開催した EBP (Evidence-based Practice) ワークショップを講義1単位として読み替え、演習は平成18年度の後期の1月～2月に実施した。

EBP ワークショップはオーストラリアのクィーンズランド工科大学保健衛生学部看護学科より、Mary Courtney 教授と Ann Chang 教授を講師に迎えて、平成18年11月14日から16日まで本学で開催した。ワークショップの受講者は全体で34人であった。

◆リンケージⅡ講義としての EBP ワークショップの講義内容は以下のとおりである。

- EBP とは? : 研究と EBP の違い、EBP による利益、EBP の活用例など
- システムティックレビュー (Systematic Review ; SR) について
 - ・SR のプロセス ; プロトコルの作成 検索方法 データベースへのアクセス

- ・SR の評価 ; レビューの論点 検索方法 選択基準 批判的吟味 データ統合 レビュー結果の報告 結論と提言

- ・メタアナリシス ; 目的 方法
- 看護実践、教育、政策における EBP の活用方法

EBP ワークショップのアンケート結果を図2に示した。34人中28人から回答があった。

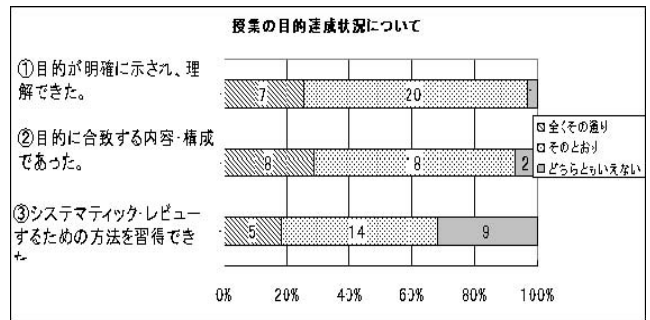


図2 EBP ワークショップの目的達成状況

SRの方法が習得できたかについては、「どちらでもない」と9人が回答していた。しかし、博士後期課程の学生は、自由記載で看護学研究方法論、リンケージⅠ講義、看護理論開発方法論、ワークショップと段階を経手講義を受けたことが、EBCPの内容を理解するのに役立ったと述べていた。このことからワークショップの目的はほぼ達成できたと考える。

◆リンケージⅡ演習の内容は平成18年11月に開催された EBP (Evidence-Based Practice) ワークショップの講義内容に基づき構成した。

- SRのプロセス : 辻ら (2006) の文献を用いて、SRのプロセスを学んだ。
- SR論文のクリティーク : 新井と高橋 (2006) の文献について、Critical Appraisal of a Systematic Review のプロトコールに沿って批判的に吟味した。
- SRの計画立案 : 学生 2-3 名を1グループとして、学生個々に関心ある研究テーマのSRプロトコールを作成した。学生はこのグループワークを次の演習で活用できるように自己の研究テーマに関する疑問の定式化やキーワード、文献データベースの選定を行なった。
- メタアナリシスの分析ソフトの使用 : SRで得られたデータを統合するための分析ソフトの使用方法を学んだ。
- 課題学習と発表 : 学生が自己の研究テーマに即した英語論文5-6文献を抽出し、SRの一部分を自己学習

することにした。レビューした内容はレポートにまとめて提出するとともに発表し、ディスカッションにより意見交換を行なった。図3に学生の評価を示した。

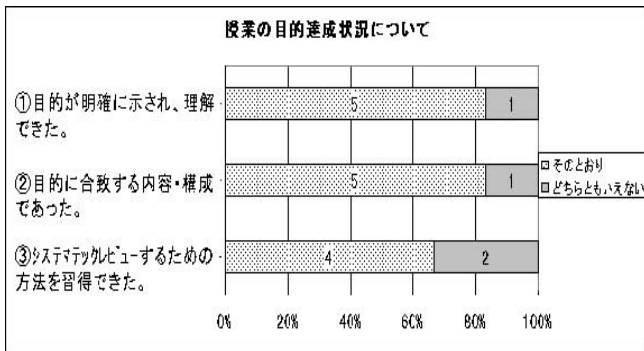


図3 18年度リンケージII講義・演習目的の達成状況

【成果】

<学生へのアンケート調査>：リンケージ・プログラムについて学生による評価を平成19年2月に実施し、教育効果を検討した。対象者は在籍している大学院生74人であり、31人から回答(回収率41.9%)があった。図4はEBCP/EBM/EBNの手順についての理解度を示しているが、90%以上の学生が十分理解できた、まあまあ理解できたと回答していた。

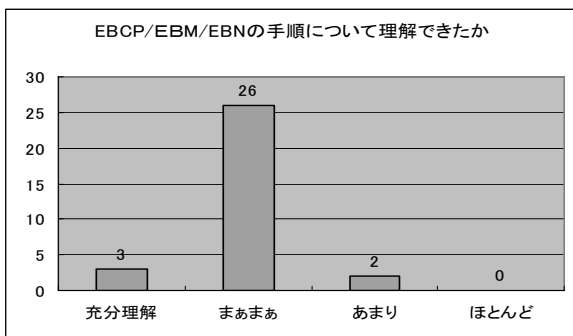


図4 EBCP/EBM/EBNの手順についての理解度

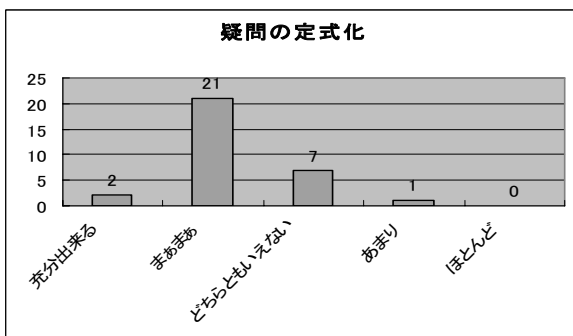


図5 疑問の定式化の実践の程度

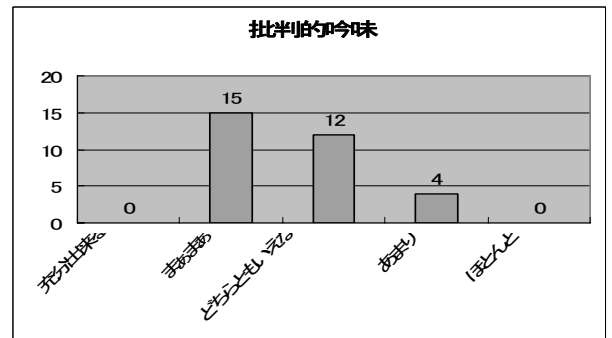


図6 批判的吟味の実践の程度

図5～6はEBCP/EBM/EBNの手順の中で、疑問の定式化や批判的吟味がどの程度実践できるかを示している。疑問の定式化は約7割以上ができると回答していたが、批判的吟味はまあまあできると回答した学生が約半数であった。図7の研究や臨床での適応については、どちらともいえないが約半数いたため、今後も講義・演習でさらにEBCPについて強化し、臨床で実践できるようになることが課題である。

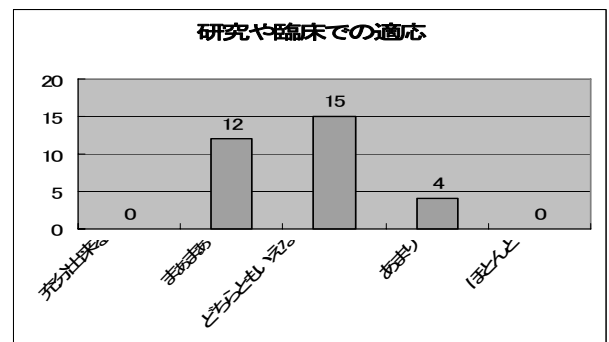


図7 研究や臨床での適応の程度

<教育課程の編成>：平成19年度よりリンケージの講義内容は正規のカリキュラムに組み込み、演習内容は選択科目として前期課程で看護学研究法演習1単位(30時間)、後期課程で看護学研究方法論演習1単位(30時間)として開講するに至ったことは大きな成果である。また、CNS修了生が多い中、後期課程への進学者が2名いたことはリンケージ教育プログラムの成果として評価できる。

<教育研究指導体制>：リンケージ教育プログラムでチームティーチングという形式を取り入れてきたことは、従来からの蛸壺式教育体制を改善するものである。新しく開講する演習科目でも取組実施担当者が中心になって引き続きグループティーチングを実施していく。他の科目においても複数の教員で

指導体制にあたる科目が増加しており、実質化につながっていると評価できる。

② 文化的差異への鋭敏性を育む教育の実施

文化的差異への鋭敏性とは何か、なかなか日本では定着していない概念であるが、英語論文の批判的吟味をする、看護実践にエビデンスを適用する場合などに看護研究や看護実践の背景にある文化的差異を認識することが必要となる。そのような感性、認識の視点を高めていくことが自国文化の独自性を知ることや、他国との看護の共通点、相違点を把握することにつながる。文化的差異への鋭敏性を育む教育の一環として、この2年間に取り組んだ事業の概要は以下のとおりである。

【国際シンポジウムの開催】

1回目は平成18年3月に中国、韓国、米国、日本の研究者を招請し、「東アジア文化圏における療養上の特徴と家族の関わり方」のテーマで開催した。参加者は163人であり、各国の病気のとらえ方、家族介護のあり方の違いを知る機会になった。

2回目は平成18年9月にタイ王国マヒドン大学より4名の研究者を招請し、「博士後期課程におけるEBCP：文化的差異への鋭敏性をいかに育むか」のテーマで開催した。参加者は94人であった。マヒドン大学は博士後期課程の学生を米国に1年間留学させるなど先駆的な取組をしており、諸外国との学術交流も積極的に深めていた。

【海外研修】

米国ミネソタ州メイヨークリニックでの研修には平成17年度、平成18年度に学生4名ずつが参加した。学生は自分の専門分野に応じた研修を通して、エビデンスに基づく看護実践の実際やCNSの活動内容を具体的に知ることができ、今後の看護活動への示唆が得られたと考える。平成17年度のオーストラリアクイーンズランド工科大学保健衛生学部看護学科での研修は、EBPの考え方を中心に、医療制度の違いも学ぶことができた。これらの研修では学生は異文化に触れる機会に恵まれるとともに、英語論文の読解や意思疎通を図れる語学力の重要性を改めて認識していた。

【国際研修活動】

東アジア諸国の博士後期課程の学生、看護教員との学術交流を深めるために、平成18年3月に開催された第9

回EAFONS(East Asian Forum of Nursing Scholars)に博士後期課程学生3名が参加し、5名の教員が研究発表を行なった。平成19年2月に開催された第10回EAFONSでは、博士後期課程学生3名が研究発表を行なった。

【国際交流活動】

学術交流を深める目的で中国の河南科技大学、韓国の順天青巖大学、タイ王国マヒドン大学を訪問し、共同研究の可能性等について話し合った。

【国際看護セミナーの開催】

平成18年7月にイリノイ大学看護学部のJanet Larson教授を講師に迎え、「Evidence-based Clinical Practice—生理学的指標を用いた看護研究の進め方—」をテーマに開催した。エビデンスに基づく実践上の判断として患者の好みと行動、臨床の状況・環境、ヘルスケアの資源、研究のエビデンスが必要であると講演され、参加者は81人であった。

【成果】

海外研修や諸外国研究者と交流したことで、英語能力習得への意欲を高めるとともに、EBCPへの理解が一層深まったと考える。国際シンポジウムや国際看護セミナーの開催は諸外国における看護教育や看護実践の実状を知る機会となった。Mayo Clinicでの海外研修は看護実践におけるエビデンスの活用・実践の実際を修得できた。

③ 研究活動の活性化

エビデンスの構築に寄与する若手研究者の育成の一環として看護介入研究を計画・実施する博士後期課程の学生を対象に研究助成を行なった。平成17年度4名、平成18年度は5名が助成を受けた。また、教員に対しても国際的な視野に立った共同研究3件を奨励することで、研究活動の活性化に貢献した。博士後期課程の学生は研究成果を国際学会で発表し、エビデンスレベルの高い国際的な視野に立つ研究をしていく必要性を理解する機会になった。

(2) 社会への情報提供

本事業の社会への情報提供としては、ホームページの立ち上げ、DVDの作成、学外におけるフォーラムや学会への参加などを積極的に行った。最後に事業報告書を

作成した。

① ホームページ

ホームページの開設、更新など運用管理については業者委託とした。また、事業の一環として開催される国際シンポジウムの情報提供ならびに受付などにも対応できる仕様とした。セキュリティおよび保守点検についてはクオリティの高いものであることを確認した上で、サーバーはレンタルサーバーとした。平成 17 年度国際シンポジウムでは初めてインターネットによる申し込み受付を導入し、平成 18 年度国際シンポジウムでも活用した。

本事業のロゴマークは EBCP、人、地球、リンケージを模式的に配し、商標登録した。本事業における EBCP 志向、博士前期・後期課程のリンケージ、文化的差異への鋭敏性という 3 つの鍵概念を表しており、事業案内パンフレット、シンポジウムのポスター等に活用した。

② DVD 作成

国内外の看護学教育・研究者への広報を目的して大阪府立大学大学院看護学研究科及び看護学部を紹介する DVD を作成した。

③ 報告書等の作成

事業活動報告書は概要版(34 ページ)を 300 部、活動報告書 (208 ページ)100 部を作成し、概要版は全国の看護系大学に送付した。報告書は本学図書館にも寄贈し、来学者、学部学生等に見てもらった。資料集 (656 ページ) も 30 部作成した。

④ その他

平成 17、18 年度 2 年間の本事業の取り組みについて、大学教育改革合同フォーラムと第 26 回日本看護科学学会交流集会で紹介した。

○大学教育改革合同フォーラム (文部科学省主催)

日時：平成 18 年 11 月 12 日～13 日

場所：パシフィコ横浜

内容：取り組みをポスターセッションで紹介。約 10 部のパンフレットを配布した。

○第 26 回日本看護科学学会交流集会

日時：平成 18 年 12 月 3 日

場所：神戸国際会議場

内容：交流集会でポスターを提示し、パワーポイントで取組を紹介し、根拠に基づいた看護実践を目指す若手研究者を育てる大学院教育について意見交換を行った。

4. 将来展望と課題

(1) 今後の課題と改善のための方策

若手研究者育成を目指して EBCP に焦点化した教育プログラムであったが、今後は EBCP の考え方を実践の場である臨床に浸透させていく必要がある。修了生は教育・研究、臨床の場でその活躍が期待されるが、本学のこのプログラムを受講していない看護職者にも教育プログラムを拡大していくことが看護ケアの質向上に資する。今後は大学院教育実質化支援プログラムに公募し、発展させていきたい。

教育指導体制の面では、チームティーチングは学生にとって有効な方法である。しかしながら、事業の後半では、大学全体としての取組が薄らいだ面もある。新しく開設した演習科目の平成 19 年度の担当者は取組実施者が中心となるが、将来的には准教授をはじめとして、講師、助教も含めてより多くの教員が係って担当できるようにしていきたい。

リンケージⅡの成果として看護介入プログラムを開発するまでには至らなかった。しかしながら、演習の開講時期を後期にしたことで、正規授業科目の講義の中に EBCP やメタアナリシスの考え方を組み込むことにし、既存開講科目の講義内容の見直しにつながった。このことは将来的に看護介入プログラムが開発できる素地づくりができたと考えるので、看護学研究方法論演習、各専門分野の演習において内容を強化していく予定である。

今回のプログラムの実施は本学の組織的取組による教育改革にとどまらず、将来的には近隣の大学との連携、これまで学術交流を深めてきた東アジア文化圏の大学と協働できるような大学院教育プログラムに発展させていくことで、看護学研究科全般にわたっての教育改革に貢献すると考える。

(2) 平成 19 年度以降の実施計画

① 教育課程

リンケージ・プログラムの成果でも記述したように、平成 19 年度からは EBCP の考えに基づく選択科目 (博士前期課程；看護学研究法演習、博士後期課程；看護学研究方法論演習) を、1 年生を対象に開講していく。特に博士前期課程の演習では、看護学研究科に付置した療養学習支援センターや研究科用の実習室を使用する。

② 研究活動

今年度は大学院生、教員の研究活動をさらに推し

進めていくために、大学院生と教員が協働して研究活動を展開できるようにする。

特に療養学習支援センターを活用した研究の推進を図っていきたい。学生主体の研究活動に対しても研究助成をしていく予定である。

③ 国際的な学術交流

文化的差異への鋭敏性の涵養も含めて引き続き国際的な学術交流を継続する。タイ国マヒドン大学看護学部とは国際シンポジウムも含め、3回にわたる学術交流により共同研究を進めている。さらに博士前期課程学生の交流は東アジア圏の文化的な背景にもとづく看護実践の実際を学修する機会とし、国際的な看護活動に貢献できるものとする。また、大学間の国際交流締結も視野に入れており、長期的展望にたった教員や学生の交流を図っていく予定である。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における事後評価結果

【総合評価】
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的は十分には達成されていない
【実施（達成）状況に関するコメント】 看護実践のエビデンス（科学的根拠）を探求するプログラムが、教育課程の中に位置付けられ、着実に実施された。博士前期課程と後期課程を同じ概念で連携させる試みが、計画通りに実施され、大学院教育の実質化に貢献している。 また、ホームページ等で取組内容が公開されており、他大学への波及効果が期待できる。 今後、本教育プログラムを受けた博士課程の学生が、EBCP（Evidence-based Clinical Practice）を志向したテーマに取り組み、教育・研究、臨床の場で活躍することが期待されるが、今後の展開に向けて、アジア地域との国際性のある研究への取組のための方策が期待される。
（優れた点） ・ 研究科全体での組織的な取組になっており、カリキュラムの継続性が期待できる。
（改善を要する点） ・ 国際性の育成やアジア文化圏での研究の発展への具体的な方策の検討が必要である。